

形容詞性接尾辞「-っぽい」の展開

岩 崎 真 梨 子

1. はじめに

「-っぽい」は動詞連用形や名詞などについて、「怒りっぽい」「水っぽい」などの形容詞を形成する接辞である。まず、グループ・ジャマシイ(1998)で現代語の「-っぽい」がどのように使用されているか確認する(以下、下線は岩崎による)。

- (1) a 男は白っぽい服を着ていた。
- b あの人は忘れっぽくて困る。
- c 30にもなって、そんなことで怒るなんて子供っぽいね。
- d この牛乳水っぽくてまずいよ。
- e 死ぬだとか葬式だとか、湿っぽい話はもうやめよう。(233頁-234頁)

(1) a は「赤・白・黒・黄色・茶色」など色を表す名詞と共に用いられて、「その色をおびている・その色に近い」という意味を表す。)、(1) b は「怒る・ひがむ・ぐちる・忘れる」などの動詞の連用形に付いて、「すぐに...する・よく...する」という人の性質を表す。)、(1) c は「子供・女・男・やくざ」等に付いて、「子供/やくざのようだ」「いかにも女/男という感じがする」という意味を表す。)、(1) d e は「そのほか「水っぽい(水の量が多くて薄い)」「湿っぽい(湿っている感じがする)」などがある。」と述べられている。一方、『日本語文法ハンドブック』(2000)に、以下の指摘が見られる。

- (2) ◆「-っぽい」には「どうやら明日は雨っぽい。」のように、状況からの判断を表す用法もあります。(398頁)

この例では、話者の知覚に基づき、「どうやら明日は雨(が降る)」という事態が推測されたと考えられる。また、近年の雑誌や小説には、以下のような句接続の例が見られる([]内は岩崎による)。

- (3) 息子の史也は|最近中二になって彼女ができたっぽいのに|まだまだあどけない。(「みんな元気。」105頁 2004)

この例でも、話者の知覚・内的感覚・気配から「息子に彼女ができた」ことが推測された

と考えられる¹。以上のことから、(1)が対象の属性を表す形容詞として使用されているのに対し、(2)(3)は事柄に対する推量を表す判断のモダリティ形式と考えられる。「-ばい」が推量を表す用法については、各先行研究でも論じられているが、こういった例がいつ頃から、どのように使用されているかについては、未だ考察の余地があるように思われる。本稿の目的は、推量を表す「-ばい」について、史的展開を踏まえ、意味用法及び成立の過程を明らかにすることにある。

2. 先行研究

推量を表す「-ばい」は近年に見られ、尾谷(2000)、小島(2003)、ケキゼ(2003)、小出(2005)などで取り上げられている。まず、尾谷(2000)では、「-ばい」の「カテゴリー化」に着目し、「-ばい」は「Xの属性を多く含む」ことを表す用法から「Xのカテゴリー-成員である可能性が高い」ことを表す推量用法へと拡張したと指摘されている。そのうえで、「終わってるっばい」のような句接続の例は〈Xであるという判断(もしくはカテゴライズ)される可能性を多く含んでいる〉という判断可能性の含有量)を表すとする。また、ケキゼ(2003)でも、現代語の「-ばい」が「カテゴリー-認定の判断」の用法を有すると述べられている(以下の用例はケキゼ(2003)による)。

- (4) a (はっきり見えないものについて) それ、橋っばくない?
- b (空を見上げて) どうやら明日は雨っばい。
- c (引き出しを整理しているときに) この紙、大切っばいよ。

これらは、〈正体のわからない対象Yは[X]である可能性が高いという推量的判断)を表す。また、(4)cのような〈対象Yが「その属性を持つモノ」のカテゴリー-に帰属する可能性があるという意味)を有する「カテゴリー-化」が進むと、「レストランで山田先生っばい人を見た。」のような「個体の同定)になると指摘されている。

(3)のような例については、特に小島(2003)・小出(2005)に記述が見られる。小島(2003)では、「世論は作られるっばいよね」などのインターネットで採取した例に対し、「「ばい」は「みただ」や「らしい」「という感じである」あるいは「そうだ」というような意味で用いられている。何れも極度に口頭語的ではあるが、「ばい」がその種の推量・推定を表す助動詞的なものとしての用法を獲得しつつあると言ってよい。」と述べられている。小出(2005)では「-ばい」を「辞書類に登録されている用法(旧用法)」と「近年に見られる用法(新用法)」に分け、「新用法」の「-ばい」を以下のように分類されている(⑤の用例は小出(2005)

1 仁田(1991)において、〈微候は、視覚や聴覚などで捉えられる明確に外界に存するものだけではなく、内的感覚や気配といったものであってもよい。〉と述べられている。

による)。

(5) ①事実としての確からしさの表現に関わるもの

例：け、結構寒いよね！夜は雨が降る**っぽい**なあ。

②話し手の主張であることの表示あるいは発話内容の伝え方に関わるもの

例：やすこちゃむと静代さんに**会ってみたいっぽい**～(素)

③表現の間接化に関わるもの—直接表現の留保—

例：夜、MAD TVを見てたら、Ice-Tさんが**出てたっぽい**。ネタにされたりラップしたりしてた。West Castなんかだぜー、とかいいながら。

④メタ表現に関わるもの

例：風邪だ。風邪**ひいたみたいっぽい**感じ。曖昧。喉いたい。

小出氏は、新用法の「-っぽい」は、終止形に接続するという「形態論上の変化」を経ており、〈「コト」を受けることができるようになったという形態論上の特質と、ある対象の中に別の要素が含有されるように感じられることの表現という本来の意味的な性質が結びつけば、概言的な表現として成立することはごく自然なことであろう。〉と述べられている。また、新用法は「命題めあてのモダリティ表現→発話・伝達のモダリティ表現→メタ言語表現」と変化していると指摘されている。

本稿では、以上の点に留意したうえで、推量を表す「-っぽい」がどのような判断を表すかを明らかにすることを目標とし、「-っぽい」の上接語の広がりや意味用法を検討していきたい。

3. 近年の「-っぽい」の意味用法

ここでは、句接続の例が見られるようになった近年の「-っぽい」を取り上げ、意味用法を検討する。用例は「CD-ROM版 新潮文庫の100冊」の1970年(昭和45年)²以降の作品(用例末尾に【新潮】と記す)、1997年・1998年の新聞記事、1971年・2007年の小説、1994年・2008年の雑誌から採取し、1267例である(資料に関する詳細は11頁を参照されたい)³。

尾谷(2000)・ケキゼ(2003)でも着目されている通り、近年の「-っぽい」では、上接語が「女」「子供」「田舎」といった「属性」を表す語に注意される。今回採取した用例によると、「人物の属性」を表す語と「人物以外の属性」を表す語に大きく分かれる。まず、「人物の属性」を表す語の例を挙げる。

2 句接続の例が1976年に見られることによる(4節参照)。

3 連体形「-っぽい」570例、終止形「-っぽい」216例、連用形「-ぽく」392例・「-ぽかつ(た)」16例、接辞「-さ」を承接した「-ぼさ」73例である。

(4) a 「私思うんだけどね、つくづく、女っばい女になりたかったわ」

(【太郎物語 大学編】1973)【新潮】

b 人間社会でも、最近は女性がたくましくなり、逆に女っばい男性が増えているよう。

(毎日新聞 1997.6.13)

c 女っばいふりしたり、強かったり、弱小だったり、大げんかして声をからした後並んで月見たり、

(【N.P】169頁 1990)

d スタッフさんで女性っばい動きの男性がいるので、動きを参考にしてますね。キュッキュッとキレのいい感じの動きで、すぐ人を触るんです(笑)。

(【non-no】No.816 2006.11.20)

これらの「-ばい」は「(対象が) 上接語の属性の性質を有する」ことを表し、且つ上接名詞に対立する属性が存する。このような用法について、国松(1970)では、「通常の程度以上にその特質を強く現す(女っばいしぐさ)」「本来ならば女の特質が期待される対象に、男の要素が現れている(男っばい女)」の2通りに分けられると指摘されている。確かに、「男」「女」のように対立する属性が存する場合は、(4) aのような「対象と同一の属性の性質が現れている」ことを表す場合と、(4) bのような「対象と対立する属性の性質が現れている」ことを表す場合に分けられる。ただし、「女っばいしぐさ」のような例は、(4) c dから分かる通り、同一の属性と対立する属性の何れにも見られるようである。一方で、対立する属性がない語も存する。

(5) a Hが「オトコ姉ちゃん」とあだ名して、悪童たちと一緒にからかったオカマっばい 映写技師に、赤紙(召集令状)がきた。

(毎日新聞 1997.3.21)

b オレまず基本的に【黒髪】が好きなんですよ！ちょっとお嬢さまっばい 雰囲気か。

(【non-no】No.846 2008.3.20)

c とっても元気でポジティブな楽しい曲。聴くとハッピーになれるし、とっても私っばい 曲だなんて思います(笑)

(【MORE】No.372 2008.6)

これらの「-ばい」でも「(対象が) 上接語の属性の性質を有する」ことが表されている。ただし、(4) c dと同様、「XっばいY」のYの属性は問われず、(5) aのような「対象が属さない属性の性質が現れている」ことを表す場合と、(5) b cのような「(対象に) 上接語の属性に典型的な性質が現れている」ことを表す場合の2通りが見られる。次に、「人物以外の属性」を表す語を承接する「-ばい」の例を挙げる。

(6) a バツと見て、ほかの4人のメンバーが草食動物っばい 雰囲気だからか、オレだけ肉食動物に見られたりする。

(【MORE】No.372 2008.6)

b ドレスっばい のもあるけど着ていく場がないんですよ。

〔non-no〕No.857 2008.9.5)

- c とことん、今年っぼいスタイルだが、しっとり落ち着いた雰囲気にとめられるところは、ミセスの強みかも。
(産経新聞 1998.11.16)

これらは(5)b cと同様、「(対象に) 上接語の属性に典型的な性質が現れている」ことを表すと考えられる。また、(5)(6)の例は何れも「男」「女」や「大人」「子供」といった属性よりも外延が小さく、従って内包は大きい⁴。これとは逆に、属性が不明の対象について、特徴から外延を推測する例が見られる。

- (7)a そしたら薬局の中から、少しだけブルーがかった白衣、じゃないなあ、ブルーなんだから、とにかく薬剤師っぼい恰好したおやじが出てきて、

(「おしゃべり怪談」112頁 1999)

- b 先日、バリバリのキャリアウーマンっぼいスーツ姿の女性が牛井屋さんで勢よく食事していたんですよ。
(〔an・an〕No.1523 2006.8.9)

(7)a では、「(薬局から出てきた) おやじの恰好」が「(少しだけブルーがかった) 白衣のような服装」であったことから、「薬剤師の恰好」に極めて近いことが示されている。(7)b では、話者がどのような根拠に基づいて推測を行ったか明示されていないが、「スーツ姿の女性」が、「忙しそう」・「仕事ができそう」といった雰囲気を有していたと想定することができる。このような、正体がよく分からない対象に対し「XばいY」とする場合は、話者の知覚によるとYはXに極めて近い属性であるという近似が表されると考えられる。(7)の例は何れも話者の回想によるものだが、続いて話者が属性が不明の対象をその場で認識した例を挙げる。

- (8)a 確かに犬がいた。二十メートルほど離れたところを歩いていた。歩道の上をのろのろと進み、時折、鼻を地面に擦りつけている。首輪もせずに徘徊していた。

「犬がこんなところにいるなんて珍しいですね。首輪もないから野良犬でしょうか」

「柴犬っぼいな。柴のに入った雑種かな」 (〔ラッシュライフ〕25頁 2005)

- b [突然、雑誌記者の折口が訪ねてきた]「どうしたんでしょうね？」

「取材の予定は入ってなかったからな」

4 「現代 言語学辞典」(1988)による。denotation<外延>は「一つ概念によって包括される対象の範囲のこと。」を指し、例えば「木」という概念の外延は「松・杉・桜・梅」など全てである。これに対し、connotation<内包>は「1. 言外の意味。」と「2. 一つ概念に包括される対象の範囲を外延(DENOTATION)というが、この範囲内の対象に共通する性質。」の2つが示される。また、<外延が大きくなれば内包は小さくなり、外延が小さくなれば内包は大きくなる。例えば、「樹(木)」は「針葉樹」より外延は大きい、「針状の葉をもつ」という性質はなくてもよいので、内包は小さい。」と述べられている。

そこで言葉を濁した堂上に、小牧が付け加えてくれたのは分からなからうという配慮らしい。

「甘えに来たのか暇潰しか、今日は前者っほいけどね」

(『図書館危機』141頁 2007)

(8)aでは対象の外見の特徴などから、「二十メートルほど先にいる犬」は「柴犬(あるいは柴の入った雑種)」である、(8)bでは折口の口調や態度などから、「訪問の理由」は「甘えに来た」と同定されていると考えられる。一方で、これらの例は(「その場で思ったこと、感じたこと、気づいたこと」を述べる)(宮崎(2005)による)のもであり、話者の確認はないと思われる。続いて、句接続の例を挙げる。

(9)a [1976年2月に投稿されたもの] NHK第一放送昼のラジオ番組で、アナウンサーにペットのことを尋ねられた歌手石川ひとみいわく、「何か話しても、ワンチャンだと結構それを聞いているっほいじゃない。猫はそうじゃない。」

(『言語生活の耳』1989)

b 私は見た目がハデに見えるらしく、周りからは「彼氏いそう」「遊んでるっほい」とか言われるんですが、実はぜんぜん。

(『spring』No.221 2008.2.23)

(9)aでは「犬」という動物が「人の話を聞く」、(9)bでは「私」が「遊んでる(友好関係が派手であるなど)」という恒常的な性質を有することが同定されていると考えられる。これらは、性質が事柄として表されているが、(8)と大きく異ならないと思われる。一方、既定の事柄に対する話者の認識的態度を示す例も見られる。

(10)a グッチ裕三は野川の堤防の近くまで来ると誰かのウチの塀の陰にさざっと身を潜める。丸っこい身体を素早く隠して、そこから野川の様子をうかがっているっほい。

(『阿修羅ガール』163頁 2005)

b [仕事に反対気味の両親が、仕事ぶりを見に来た後の会話]

「そんでご両親、あんたの仕事ぶりのほうは何て？」

「あー、おかんはけっこうどーでもよかったっほい。二日目とかめちやくち暇持て余してたし。じゃあ来んなって感じだけど。」

(『図書館内乱』63頁 2006)

(11)a 耳もとに声をかけると、すうすうと寝息を立てていた青年が薄く目をあけて瞬きをした。まだ少し寝呆けているっほい青年に手を貸して二人でトラックを降りる。

(『キーリIX』258頁 2006)

b ま、仲直りしたっほい気配はしてたけどねー。そんなことを吹きながら基礎化粧品を片付けていく柴崎の鏡さのほうか郁には恐ろしい。別に会議でそんな雰囲気を出していた覚えはないし、報告役の柴崎は郁たちから席も離れていたのに。

(『別冊図書館戦争 I』158頁 2006)

これらは、話者が知覚によって把握した事柄が上接部分であると断定していると考えられる。特に、(10) a b・(11) a は「上接部分が目の前の状況」、(10) c・(11) c は「上接部分が過去の出来事」を表している。また、未定の事柄や、話者の意見・考えを承接する例も見られる。

(12) 「まあ、俺のほうに言う小言は当然なくなりそうにないっばいから」

(『キーリ VI』229頁 2004)

(13) それでもやっぱりエチオピアの難民、月の裏のウサギ、別の時空の宇宙人たちを助けてあげて欲しいっばい。そっちの方がやっぱりいいような気がするっばい。自意識と自己像なんて誰にでもあるんだから、そんなこと問題にする必要ないっばい。

(『阿修羅ガール』93頁-94頁 2005)

これらについても、その場の認識に基づいて発話されており、話者が知覚によって把握した事柄が上接部分であると断定していると考えられる。ただし、(12)の上接部分は話者の予期した事柄、(13)の上接部分は自身の意見・考えを承接している点で、(10)(11)とは異なる。

4. 「っばい」の史的展開

次に、3節に挙げた「っばい」の例がいつ頃から見られるか、「っばい」の展開のなかで明らかにしていく。これに際し、資料を以下の通り追加する。

『江戸語大辞典』(3節と同様【江戸】と記す)、『浮世風呂』、『誹風柳多留』、『日本国語大辞典 第二版』(【日国】と記す)、『坪内逍遙集』、『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』の1970年以前の作品、『CD-ROM版 明治の文豪』(【明治】と記す)、『CD-ROM版 大正の文豪』(【大正】と記す)、『インターネット図書館 青空文庫』、松井栄一『国語辞典にない言葉』

新山(1960)では、「っばい」(「しよっばい」など)・「ばい」の生成に関し、口語資料を調査し、(「ばい・ばい」を有する形審詞は江戸時代後期を中心とし、宝暦九年「俚言集覧」の記載を上限とする。)と述べられている。「っばい」については『浮世風呂』の例を挙げられている⁵。本稿における用例では、『誹風柳多留』(1765)の「濕っばい」(14 a)が最も古い。以下、

5 次の4例である。

「そして好男ほど浮虚で飽っばい物さ。」

「此子は恨っばい事をいふぜ。」

「さうよウ。田舎の女の声は、あはれっばくをつにふるへるのウ。」

「ヘン、醜取といひなせへ。隈みどりだけ古風で素っばひ。」

近世の例の一部を列挙する。

- (14) a 見に行ってしめっほく出る払蔵 (誹風柳多留・初編 1765)
b あらっほい仲人をする庄之介 (誹風柳多留・15編 1780)
c ひしぎめしは水っほく力なし (洒落本「残座訓」1784)【江戸】
d 全体倦速いから身が落着かねえのさ (滑稽本「浮世床」1813-1823)
e おれの顔さへ見ると、あわれっほい事ばかりいふから

(人情本「仮名文章娘節用」1831-1834)【江戸】

以上の例によると、近世では既に(14)beのような形容詞・形容動詞語幹接続の語、(14)cのような名詞接続の語、(14)dのような動詞連用形接続の語が見られる。1887年(明治20年)頃⁶までには、「色彩を表す語」に接続する例が見られるようになる。

- (15) 幾らか白っほき肌の色なり。 (『^三當世書生氣質」129頁 1885-1886)

1887年頃以降から大正にかけては、現代まで断続的に使用される語が多く加わり、これらは時代が下るにつれて1語の形容詞として固定化されると考えられる。例えば、以下のような語が挙げられる。

- (16) a そうよ、この蓋はあまり安っほい様だな (『草枕』1906)【明治】
b 頭からすっぱりと頭巾のついた黒っほい外套を着て、
(『生れ出づる悩み』1918)【新潮】
c そうよ、随分あなた忘れっほいのね。 (『多情仏心』1922-1923)【大正】

また、今期、「人物の属性」を表す語を承接する「-ほい」が見られるようになる。

- (17) a その下からさすがに子供っほい小さな足を食み出してゐる。
(『あきらめ』1911)【日国】
b 素人っほいことを訊くやうだが、今度の一件について何にも心当りはねえかね
(『半七捕物帳』1923)【日国】
c 思ひなしか挙措振舞まで落ちついて、大層大人っほく成って行った
(『敵旧忘れ得べき』1936-1936)【日国】

このような例は、これまでの名詞接続の上接語が「具体的な物の性質」を表すのに対し、「上接語の属性が有する性質」が対象の性質を表している。この点で、「水っほい」「熱っほい」といった上接名詞とは区別されると考えられる。1965年(昭和40年)頃から平成にかけては、

6 松村(1957)において、明治を前期(明治の初年から明治10年代の終わりまで)と後期(明治20年代の初めから明治の末年まで)に二分されていることによる。前期では江戸語と東京語が混在しており、(共通語としての東京語の普及は、次の明治後期以降、言文一致体の文章の確立とその普及などということをもたなければならなかった)と指摘されている。

「人物以外の属性」を表す語も見られるようになる。

■8) a 田舎っばい丸顔の背のひくい娘が喜助へ茶をだしにきた。

(「越前竹人形」1963)【新潮】

b 夏っばいセレブな小物使いもポイント。

(「non-no」No.853 2008.7.5)

c ちょっとリアリズムから離れて、ファンタジーっばい要素もとりこんだ物語物語したもの。

(「MORE」No.372 2008.6)

また、「人物の属性」を表す語も増加する。

(19) a 萩江は男っばい仕種で滑らかなぎんの肩を叩いた。(「花埋み」1970)【新潮】

b 私はいまでもそれらのどこか少女っばい配置を思い出すことがあります。

(「錦織」1982)【新潮】

c 元気で明るくて負けず嫌いで、自分っばいかなって思うんですよ。

(「spring」No.217 2007.10.23)

これらは全て「子供っばい」などと同様の語と考えられる。さらに、外来語や名詞句を承接する語も加わる。

(20) a ちょっとアナクロっばいかんじの中折れ帽をかぶっていた。

(「新橋烏森口青春篇」1985-1987)【新潮】

b 捜査員に囲まれて自宅から出てきた橋本容疑者は、グレーっばいスーツ姿。

(産経新聞 1997.11.4)

c 「そういう嫌味なこと言わなかったらせつかく正義の味方っばいのに！」

(「図書館内乱」294頁 2006)

また、特に2000年代では、文相当句に接続する例が見られるようになる。

(21) a 有名な書家が頭を殴られて死にかけたっばいんだからもちろん事件になるのに

(「山山中の獅見朋成雄」52-54頁 2003)

b 私より全然成績悪い姉だったが、その分勉強に苦勞していて、人が何が判ってないかを共感できるっばいのだ。

(「みんな元気。」77頁 2004)

c 教育委員会に限ったことじゃなくて、とにかく権威のあるところからの要請に逆らえないっばい

(「図書館戦争」97頁 2006)

5. おわりに

以上、「-ばい」の史的展開を踏まえ、「-ばい」の上接語の変遷及び句接続へ拡張した経緯について検討した。これによると、特に1970年頃から「子供っばい」や「田舎っばい」のような上接語自体が属性を表す語に接続の例が増加している。そのなかで、属性が不明の対

象に対し「薬剤師っばい恰好」と近似を表す例や、「(あの犬は) 柴犬っばいな」とその場で同定する例が見られるようになり、続いて句接続の例が見られるようになったと考えられる。

句接続の例は、話者が知覚によって「対象の恒常的な性質」「目の前の状況」「過去の出来事」といった規定の事柄を把握するものが半数を占めるが、一方で、未定の事柄や話者自身の意見・考えを承接する例も見られた。これは、小出(2005)の②の用法や、ケキゼ(2003b)で「やわらげ」とされているものと関わると思われる。また、自身の感覚について述べる点では、「湿っばい」「安っばい」などの(外部の対象を、なんらかの形で自己の人間的感覚のふるいに掛け、評価する)(森田(1982)による)用法とも関連している可能性がある。「助けであげて欲しいっばい」のような例に関する詳しい検討は、今後の課題としたい。

【参考文献】

- 青木博史(2006)「近代語における述部の構造変化と文法化」『九州大学国語国文学会』2006年6月4日 於九州大学(口頭発表)
- (2007)「近代語における述部の構造変化と文法化」『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房
- 尾倉昌則(2000)「接尾辞「ばい」に潜むカテゴリー化のメカニズム —「女っばい人」は女ですか?—」『日本言語学会第120回予稿集』於千葉大学
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト —現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- (2001)「述語の意味類型とアスペクト・テンス・ムード」『月刊言語』30-13 大修館書店
- 国松 昭(1970)「「ばい」 雑考(接尾語ノートⅠ)」『日本語と日本語教育』2
- グループ・ジャマシイ編(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- ケキゼ・クチアナ(2003a)「「ばい」の意味分析」『日本語教育』118
- (2003b)「現代日本語における表現の「やわらげ」 ～「そうだ」、「げ」、「ばい」などの場合～」『言葉と文化』4
- 見坊崇紀(1977)「ことばのくずご」『言語生活』311号
- 小出慶一(2005)「接辞「～ばい」の用法の広がり —「雪が降るっばい」という表現はどのように成立したか—」『群馬県立女子大学紀要』26
- 小島聡子(2003)「接尾語「ばい」の変化」『明海日本語』8
- 佐藤喜代治編(1977)『国語学研究事典』明治書院 p.222-p.224
- 沢本幹榮編(1989)『言語生活の耳』筑摩書房
- 新山茂樹(1960)「形容詞の接尾語「…っばい・…っばい」の生成」『国語研究』10
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房 p.36-p.40 p.59-p.68 p.122-p.134
- 前田勇(1974)『江戸語大辞典』講談社
- 松岡弘監修(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 松村 明(1957)『江戸語東京語の研究』東京堂

- 宮崎和人 (2005) 『現代日本語の疑問表現 ―疑いと確認要求―』ひつじ書房 p.145-p.147
 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
 山下崑代 (1995) 「形容詞性接尾辞「～ばい・～らしい・～くさい」について」『講座日本語教育』30

【用例出典】

- 岡田 甫 (1999) 『誹風柳多留全集 索引篇』三省堂
 坪内逍遙著・稲垣達郎編 (1969) 『坪内逍遙集』筑摩書房
 式亭三馬著・中村通夫校注 (1957) 『浮世風呂』(日本古典文学大系63) 岩波書店
 『インターネット図書館 青空文庫』はる書房 2005年
 『CD-ROM版 新潮文庫 明治の文豪』新潮社 1997年
 ……夏目漱石「草枕」
 『CD-ROM版 新潮文庫 大正の文豪』新潮社 1997年
 ……里見弴「多情伝心」
 『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』1995年 新潮社
 ……曾野綾子「太郎物語 大学編」/有島武郎「生れ出づる悩み」/水上勉「越前竹人形」/渡辺淳一「花
 埋み」/宮本輝「錦織」/椎名誠「新橋烏森口青春篇」
 『CD-毎日新聞'97』1998年・『CD-毎日新聞'98』1999年 毎日新聞社
 『産経eテキスト』産経新聞社 1997年-1998年
 『日本国語大辞典 第二版』小学館国語辞典編集部編 2000-2002年 小学館
 ……田村俊子「あきらめ」/岡本綺堂「半七捕物帳」/高見順「故旧忘れ得べき」

小説

- 舞城王太郎……『山の中の獅見朋成雄』2003.9 講談社文庫・『みんな元気。』2004.10.30 講談社・『阿
 修羅ガール』2005.5.1 新潮社/吉本ばなな……『N.P』1990.12.25 角川書店/藤野千夜……『おしゃ
 べり怪談』(『文学1999』所収) 1999年 講談社/伊坂幸太郎……『ラッシュライフ』2005.5 新潮文
 庫/有川浩……『図書館戦争』2006.3.5・『図書館内乱』2006.9.30・『図書館危機』2007.3.5 メディアワ
 ークス・『別冊図書館戦争 I』2008.4.10 アスキー・メディアワークス/壁井ユカコ……『キーリIX』
 2006.4.25・『キーリVI』2004.9.25 角川書店

雑誌

- 『non-no』集英社/『MORE』集英社/『an・an』マガジンハウス/『spring』宝島社

付記

本稿は、第221回筑紫日本語研究会(2007.8.9~8.11)ならびに日本語学会中国四国支部大会(2007.10.27)の口頭発表に基づく。発表に際し、貴重な意見を賜った。心より感謝申し上げる。

(いわさきまりこ 岡山大学大学院社会文化科学研究科)